煎茶とす

独自の文化にまで高め上げることで、さらなる帝当時中国から流入した煎茶を批判的に継承し、世事にとらわれず自由に生きた文人たちは、木村蒹葭堂や上田秋成など、文事を重んじ、風雅江戸時代の上方に花開いた文人文化。 煎茶と文人のつながりの歴史から、 今学ぶべき豊かな文化創造のあり方を知る。、、さらなる商都大坂の発展を支えたという。 風雅を好み詩文に秀で

伝――煎茶を愉しむ』(日本放送出版協会) などがある。 て一一煎茶を愉しむ』(日本放送出版協会) などがある。 とに積極的に取り組む。著書に『煎茶の旅――文人の大学や美術館との協力や、古典メソッドをふまえたの大学や美術館との協力や、古典メソッドをふまえたの大学や美術館との協力や、古典メソッドをふまえたの大学や美術館との協力や、古典メソッドをふまえたの大学や美術館との協力や、古典メソッドをふまえたの大学を表情にある。 一般社団法人「文人会」を述る。

文人 への煎茶

なりつつある。だがそもそも、煎茶は日常の飲みは無くなり、茶葉を見たこともない人が多数派にペットボトルの多種の中に埋もれて、日本茶の代ペットボトルの多種の中に埋もれて、日本茶の代の年ほど前まで当たり前に飲まれていた煎茶も、 物であったのだろうか。

なら、 あっ い。この稿は、そんな文人茶についてである。 ではなく、 表現に用いた特殊な嗜好品であった。 実は煎茶は、 たのだ。 文人の行う煎茶、文人茶と言い換えてもよ というい むしろ非日常に浸るための手段でさえ 現在の煎茶のイメージと一致し難い 文人と呼ばれる知識人達が、 い方がある。 茶道に倣って礼 日常のもの 美の

と芸能性への指向をもつものが煎茶道であろう。 それはまた、 れている。 生活の場の煎茶に式法を加え、 煎茶を用いた茶道として幕末以来行わ 文人茶の変形と言えなくもない。 社交性

> 芸能化や定型化へ 0 化しようとする立場とは、 の文人茶とは、 てなし」の語に集約される煎茶道の礼式は、 になることで煎茶道は形成された。 て合体する。 わざとして大衆化をめざし、非日常と非社交性 非日常的な作法が、日常の美の指標 拿 やはり相当に異なるのである。 への要素を孕んでい や飾り 式法と礼法を接点にし つらえ) た。 しかし「おも 日常を美 社交

「自娯」 るには、 文人は非日常を「去俗」とい といっ 今一度そもそもと始めなくてはならない。 た。その去俗自娯の煎茶文化を語 非社交性を

「文会」の茶 団茶

文化が第一義であり、 もあったにすぎない。 の表現に必要な茶樹が植えられたのである。 のではない。 飲料として輸入され、 茶はそもそも中国からの渡来文化である。 まず茶の文化が舶載され、 その文化がたまたま飲料で 茶の木が移植されたとい 茶文化 茶は L か

> 峨天皇(7 最初 ことに唐の宮廷文化を積極的に受容した嵯 0 伝来は平 -安初期、 2) 周辺がその担い 遣唐使に よるも ・手であっ のであ た

知貪鸞駕忘囂處 避景追風長松下 峨帝を継いだ淳和天皇(78 日落西山不解還 提琴搗茗老梧間

送春薔棘珊瑚色 此院由来人事少

迎夏巌苔玳瑁斑 況乎水竹毎成閑

描く茶の風景である (『文華秀麗集』)。

0

が

オギリ 西に傾いたが帰りたくなくて……。 石の間の緑の苔はまるで鼈甲のよう。 静かな庭。 の老木。 初夏。 七絃琴の音に茶をいれる。 バラはサンゴの色に咲き、 松風。 日で

代製茶法の一過程であるが、 けは全て中国的な時空にある。詩の「搗茗」 バラ、 サ ンゴ、 鼈甲、 アオギリ、 ここでは茶をいれる 七絃琴、 は唐 仕掛

動作のレト この茶は「団茶」と呼ばれるもので、 ij ックに用いられている。

製茶した団茶を飲もうとする情景が先の詩なのでして搗き、焙じて保存性を高くしたものであった。 茶葉を蒸

かな粉に る。 茶を火に炙り、 それぞれに詩をつくるうち、 麗しき庭で楽を奏で詩を詠じる。 茶碗に酌み分けるのである。 待つこと暫し。 U暫し。白い花のようなものが浮か鍑という鍋で沸かした湯の中にい 薬研[*1]で擂り、 のようなものが浮かべ、円盤の餅のような団、円盤の餅のような団を擂り、篩にかけて細で擂り、篩にかけて細

茶を飲むに至るまでの長い時間。 時と感興である。 この際に重要なのは茶そのものではない。 この詩に描かれた茶の いや文芸のひとつなのだ。 詩と語ら 情景は、 遣

> 六朝時代には「清談」[*2]の文化がある。 唐使によって伝わった茶の主役は漢詩文であり、 な文芸表現であった。 茶は伝来の当初から、 を嗜み、漢詩文的世界に耽溺することを意味した。 生成する。 これにもとづく会話であったろう。隋唐に先立つ 思索と口調がわが王朝人に移って、 わが宮廷教養人にとって、茶は漢詩文 漢詩文による知的かつ美的 詩文の茶を 清談

茶会が文芸の集いであり、 徽宗皇帝の『文會圖』は、 子を伝える。 あったからだ。 字も用いる)ともいう。 茶の集まりは茶会である。 「文会」と称する。茶の集まりは文事の集いで 唐代と茶のい 台北の國立故宮博物院に蔵される しかし唐から宋にかけて 宋時代の れ方に変化はあるが、 茗, 「文会」である 筵、 文会」 、醼などの の様

文會圖 徽宗皇帝画

宋時代の「文会」の様子を伝える貴重な一枚。文人たちが集い、茶を愉し みながら詩詞をつくり、哲理を論じあう。 所蔵/台北・國立故宮博物院蔵

> 会」として、 ことを示して 茶を受容したのである。 いよう。 わが嵯峨・ 淳和朝も

葉や、 語が使われる。 方に由来する。 Ŕ か「煎茶」とか呼ぶ。「煎茶」の語は団茶のい いれて煮る必要があった。この方法を「煮茶」と ところで団茶をいれるには、粉にした茶を湯に 各時代で変遷するにもかかわらず そのいれ方をだけ指すものではない。 以後、 「煎茶」は、今日の日本の煎茶茶 団茶が廃れ製茶法も 「煎茶」 れ方れ 0)

「文会」の復興

ある茶は、 史は礼式化、 文芸性は希薄となる。 後鎌倉時代に禅僧たちの手で再渡来し、 文芸性は希薄となる。「文会」ではなく、茶の湯して興隆する様はよく知られていよう。が一方で 遣唐使の停止 宮中の薬用のみとなって廃れる。 形式化、 芸能化の歴史である。 4 によって、 渡来文化で 茶の湯と その

漢詩文であり、 い手は学問に目覚めた町人であった。 漸く江戸中期に至って、新しい文芸活動ととも 「文会」の茶が再生する。 茶は急須と茶葉の煎茶であり、 文芸活動とは儒学と 担

者という職業を生み、 詩人という職業も成立する。儒学はまた儒者、 優れた学者を集め、 んで八代将軍吉宗の時代へと進んでいっ の漢詩創作奨励は、 五代将軍徳川綱吉の学問好きは、 折衷学など、 荻生徂徠(1666 朱子学以外に多彩な学派を生 唐詩ブー 徂徠学、 ムを巻き起こす。 古義学、 周辺に多くの た。 古学、 1 7 2 8) 陽 漢 学

漢詩文などの文芸の主役は町人たちであった。 人文化に漢文脈が加わっ 江戸の昌平坂学問所、 ともに町人たちにも開放された。 大坂の懐徳堂、 今や儒学、 各地の藩 町

犯被鲁巡 春茶 多根外属 **发达挈维福** 图芳桃 图 卷绕松维路

儒学を学ぶ町人たちは、当然にこの操作を知った江戸幕府によって士は武士に読み替えられていた。文人 [*3] を社会の指導者とするものであったが、士農工商の儒教ヒエラルキーは、本来、士大夫

なら、 あり、 の裏付けを、 めることで、 を抱かせる。 社会進出の可能性を示唆し、 の構成原理を否定する。「聖」が各自の心にある 陽明学では、 に近づき得る。陽明学は個人の能力による 凡人はそれを目標に学ぶのだという朱子学 自彊と自己啓発を勧めることで、 儒学によって得たのであった。 町人たちは、階級によらぬ社会進出 絶対的な「聖」が凡人の遥か彼方に 各個人の心の中にある「聖 権威の絶対性に疑い 誰でもが 亡を認

人の経済活動の中心、大坂が学芸の中あり、漢文脈は町人のものであった。 だからこそ文芸の主役は町人たちとなったので 大坂が学芸の中心地ともな もとより 町

て宋詩風の創作へと進む。 詩作は唐詩を真似ることから始まったが、やが 唐詩の劇的表現よりも

> 宋詩の えた。 宋詩的表現は、 を、 | 別で型に、 |素直に表現することが出来た。町人にとって |の生活者目線を学ぶことで、今に生きる自分 自分を表出する、 現代詩表現と言

こうして儒学思想

(ことに非朱子的思潮)

である。 文 0 の茶が復活したのである。 上げ始めた頃、 この頃、 頃 (ことに宋詩的感性) が、 西暦 1730年代後半であった。 かの地の文人の茶文化が知られ 明清書籍の輸入と読者層の広がりに 流入したのが、 時はおよそ享保の改革 いが、明清士大夫の煎茶自己表現の文芸を作り 「文会」

とともに、 だから、 よって、 1 6 7 5 実際に煎茶を扱ってみせた売茶翁高遊外書物に載る「煎茶」への関心が胎動する 知識人に大きな衝撃を与えた。 7 6 3 の登場は、その脱俗の風韻

代にあたる。

90) らは、

孫世

(四方棚)

1 に

1 6

捨 舊 取 新 木生於水 清潔是守 彼罄匪恥 反水之苞 汚我無受 **豈伐其滿**

伊藤若冲画・大典顕常賛 当時互いに交流のあった若冲が描いた売茶翁の 肖像。その脱俗の風貌と高潔な生き方は、多くの 文人たちに影響を与えた。 徂徠学から古注学に転じた宇野墹霞(1

物の水容れに彫りつけた詩である。 はない。 が水を集めて、 れるのだから、 じるというが、 、って恥ず、 中国古来の五行相生説によって木は水から生 が、売茶翁の使用している杉木地曲

たからと

売茶翁像

と漢詩 世代だが、 銘文を残す片山北海 川(1697~1752)は明霞のひとつ年上。翁のひとりで、翁の煎茶姿をスケッチした彭城宮のひとりで、翁の煎茶姿をスケッチした彭城宮知性に多く影響を与えた。南画様式 [*4] の最初 1 8 0 0 , の肖像をいくつか残した伊藤若冲 る。 価値観への賛歌でもある。明霞は売茶翁の子供 る。それは旧を汚れとし、水容れに託して、売茶翁の を受けることが無いということ。 1 8 0 1 しきを取る。 実際、 翁の伝記を伝えた大典顕常(17 水を持っていても所有しているわけで さて水容れに水が無くなっ 明霞の門下で翁の具列 。ひたすら清潔を守るのだ。とが無いということ。旧は捨てて新ら、使って水が無くなることは汚れがしがることはない。長く有れば汚 今この木製の水容れはむしろ木 翁の影響は子や孫世代の新しい しかも満ちても自慢するわけで 売茶翁の高潔な生き方を賛美 新を清潔とする新

茶であり「文会」の茶なのである。 だから煎茶は、漢文脈にあり、文人にあり、 かくも、漢文脈知識人たちを称して文人と呼ぶ。 のとなった。付言するなら町人士族の出自はとも こうして漢文脈の交遊に、 煎茶は欠かせないも

自娯と去俗 文房の煎茶

甄花開得両三奇 山斎風情君若許 来来日話日遅遅 寄興烹茶画又詩

には、前年党高り『単生記して、「生役年不詳」には、前年党高りを著した大枝流芳(生没年不詳)の茶」ともいう。わが国最初の煎茶書『青湾茶の茶」ともいう。わが国最初の煎茶書『青湾茶の茶」ともいう。即本は「文房 が自分の書斎の生活を詠んだ詩である。自らは卑 売茶翁に親しく接した池大雅(1723 して山斎と表現するが、書斎は「文房」ともい 文人の思索と表現の場であった。思い、 前年脱稿の 書をかき、 『雅遊漫録』があり、 絵を描く部屋である。 か つて こわが国に無かっかあり、中で文房 そして 考え、 5 76

宝暦13 (1763) 年刊 思索と表現の場であっ た「文房」の図が描か

『雅遊漫録』 大枝流芳著 文人たちの書斎であり、 れている。 所蔵/新潟大学附属図書館

文房燥彩

た文房を作ることが、 文人の条件でもあっ

ます。 しょう。 た。 妙なる美しい花が、 興に乗って煎茶をいれ、絵を描き詩を詠み 私の文房の、こんな雰囲気がお好きなら らっしゃいませんか。 充分に時はあるのです 花瓶に二、三輪咲きまし 一日お話をしま から……

須 乗っての意だが、大雅は売茶翁から、 文人花の名で知られる活け方だ。 美への賛辞。 ヲ烹テ」とも読めよう。 文人の感性が生んだ美意識である。 「寄興罐」を贈られている。 瓶にいれる花は文房を飾るもので、 世に類のないという褒め言葉 だから 「寄興」 常とは異なる 素焼きの急 「寄興ニ茶 は興に

で、烹茶、煮茶ともいう。そのため涼炉尾焼とか呼ぶ。文字通り煎茶は「茶ヲ煎ルこの寄興罐急須は直接火にかけて、急煙 でも使用される。 「煎ル」ために開発された緑茶の茶葉を煎茶とい の火に直接置く急焼が必要で、 「茶ヲ煎ル」 これは今日 急焼とか急 (文房用 もの

わけだ。 て、文人が文房で「茶ヲ煎ル」ことを煎茶という いささかややこしいが煎茶という茶葉を用

煎茶の非社交性である。 楽しみでもあり、 る。それは行為の楽しみであるとともに、 絵を描く。大雅という個人の楽しみをいうのであ しみを「自娯」と呼んだ。 の世界の楽しみであろう。 の楽しみである。花を活け煎茶をい さてこの詩前半で語られるのは、 だから文房の煎茶は 他者の存在に気兼ねしない独り 文人茶は 「自娯の茶」でもあっ 文房とは自娯の場であ こうした個の精神の楽 「おもてなし」 文房での個人 n 詩を詠み 精神の た。

の正反対にある。

た。

日常の漢詩文で案内するなら「俗用ノ物ニ非」ざなら社交となる。これは「常語ノ俗」であり、非 る人だけが理解するメッセージだ。 日がな語らん」は、 世代の文人祇園南海(1677 る世界が生まれる。 でをお待ちいたしております)などと日常語で誘う た人だけであろう。それを「御出待入候」(おい 自娯の文房に誘う相手は、風雅を共有する限られ の著『詩学逢言』に漢詩による案内を記してい 詩の後半 は一種の案内状であろう。 文房自娯の喜びに、共鳴出来 この詩の結句「来たれ来たれ 1 7 5 1 は、 売茶翁と同 る

「文会」 昌島 である。これを「去俗」あるいは「離俗」と呼ぶ。共有が条件であった。通俗とは違う価値観の共有 は、 泥句集序』)を待つまでもなく、 可能性を開く。 精神世界を垣間見させ、世俗にない新しい表現の 学問と文芸教養によって、 のいう「書巻之気」[*5](『女ム」(『画禅室随筆』)であり、 ば自娯の精神そのものが傷つくであろう。 主要な美意識であった。煎茶は「去俗の茶」であ 与謝蕪村 養によって獲得する「新を取る」ことであった。 た「捨舊取新」は、 た感性や理性を育もうとしたのである。 去俗の美意識を形作るものは、 自娯の文人の交遊は、社交ではない。 書巻の気に満ちた茶であり、 漢詩句を理解し得る教養が、 それぞれが自娯する人である、 の復興足りえたのである。 「書巻之気」[*5](『芥子園画伝』)であった。 宇野明霞が売茶翁の水容れに記し 6 636)のいう「萬巻ノ書ヲ讀 このペダンチックなまでの教 83) の「離俗論」[*6](『春 日常生活の感覚を超え 李^ゥ 漁^ѯ 去俗は文人の最も 明の文人、 通俗を超越した それゆえにこそ $\widehat{1}$ という風雅の 6 俗語でな 社交なら 交遊に §0 80 董; 其*

煎茶の立ち位置 ij テ ッ ク の精神

とりであっ 社」の主要メンバ 池大雅に絵を学び、 802)は、 た。 直接に売茶翁の煎茶に接したひ ーであった木村蒹葭堂(173 片 山北海の漢詩結社 「混沌 6

設薦花間挈瓶水滸逃世逃僧獨行踽踽 宛示淸標遺芳終古 **爱挹風流維同維羽**

0 た この めに書き付け は若冲が描く売茶翁像に、 た賛である。 大典が蒹葭堂

な精神の指標のようであった。花の間で川のほとりで、煎茶器 孤高に独り行 さは永久に伝わるであろう。 か まるで唐 b 煎茶器を携え、 の盧同や陸羽のよう。 世界か その遺した芳し 5 清らか 逃れ、

の茶詩で 想と捉え受け継ごうとする。 ゃ 翁はこの2人に匹敵するというのである。蒹葭堂 意識を主張し、 経』の著者。 ら売茶翁へと、 の盧同は、 知ら 翁の孫世代の文人たちは、 貴族的な茶に対して士大夫の茶の美 れる。 後世に多大な影響を与えた。売茶 自娯と去俗の煎茶をひと流れの思 陸羽は同じ中唐の の文人にして 「盧同七碗」 盧同陸羽か 人で『茶

こと得ざるなり……蓬莱山は何処に在らんや等の たのだが、 大雅とも蕪村とも蒹葭堂とも親し 9 4 を著して煎茶の中心的な文人と目され,1809)は、 煎茶 書『清 風 瑣 言』9蕪村とも蒹葭堂とも親しい上田秋成 「盧同の茶歌に……七椀にいたり喫む

> 定めるのである。 当然のように古典を斟酌して、 然に古典を継承するが、 そのままを受け継ぐわけではないことをいう。 語は大酔の妄言……」(『清風瑣言』煎法) その継承の仕方は、また 自らの立ち位置を Ł, 盧同 当

て、 このような姿勢は、 (『淸風瑣言』序) と述べる。 「首陽而采薇吟楚沢……洗耳……皆不得其自 同書の序文を書い 1 8 1 8 にも顕著であっ た折衷学

主義は、 それ 秋成の文学にも栲亭らの折衷学にも通有するが、選択し、自らの表現に昇華しようとする態度は、 言わ と評されたが、 ン を打ち立てようとする。 上に名だたる賢人哲人を批判し これらの人はみな自然な心を得ていない」 「首陽山 スであった。 洞庭湖畔で楚辞を吟じた屈原、 はまた江戸期を通して文人と煎茶の基本スタ 文人にも煎茶にも無縁であった。 汚れたことを聞い でワラビだけを食べて餓死 懐徳堂は鵺学問と呼ばれて折衷的 一学派に固執する教条主義や原理 古典ですら批判的に取捨 たと耳を洗った許由、 自らの美的理念 帝位を譲ると た伯 夷叔 史

信じる知性を培養している。 否定と同じく権威否定に通じ、 判精神そのものであろう。 釈し直した懐徳堂の学問姿勢は、 儒教の基本経典『中庸』を本文考証によっ 去俗の理念は通俗性の 自己の精神活動を やはり文人の批 て解

育った文人たちには当然の行為であったろう。 育の方法は、 明学ではゼミ形式の「講読」が行われた。 「会読」と呼ぶディスカッション形式であり、 ンをする「清談」の場でもあるが、儒学教育に 当時儒学は討論を重んじた。 煎茶と連動する。 個の思索を深め、 煎茶会は、 、文人の精神を形成が行われた。儒学教 デ 朱子学の教育 ィスカッショ 陽 理 は

> 談の場として「文会」の性格をいよいよ深める。念的討論と文芸的語らいの交錯する場。煎茶は漢 煎茶は清

「文会」 0 表現 喜怒哀楽と思想と

哀。 絵であり詩である。 だが煎茶の掛物はといえば、 あり、 B 0 を第 0 ただ中にある。 例えば茶の湯で およそ人の世の喜怒哀楽をもととして、 なのである。 依るべき世界であり、 一とする。 煎茶の主題は、 床は仏壇や神棚と同じく聖域で は 希望、 床の間に掛 喜び、 文人の自己表現たる 悟りの世界である。 苦悩、 人の生き方その ける軸は禅僧墨 悔恨、 迷 悲

楊龍友爲明季將帥與淸軍戰不克死。 蓋其忠義邁往之氣見筆墨間 死得其所

(1643) の箱に記された頼山陽(1780(1597~1645)。彼の描いた『江山河亭図 8 3 2 宗末動乱 の文である。 \mathcal{O} 中で、 清朝と戦って死んだ楊文騘

O所を得たのだ。 楊龍友 タッ 負けて死んだ。 チに表れて (文驄の字) ・忠義に邁進する精神は、 戦死してこそ彼は心の拠り は明代の将帥で、 清と戦 絵

63 裃で出迎えたという。 に披見を望まれた梅逸が山陽宅に赴くと、のは山本梅逸(1783~1856)である は山本梅逸(17 この軸を、 は天誅組挙兵[*1]の前にこの絵を見、 1 7 8 9 家財を処分するまでして手に 1858)もこれを見て詩を賦 後に藤本鉄石 である。 $\widehat{1}$ 山陽は V 梁* · 山 ル た

ちの列伝、 茶を常とした中国文人の中で、 茶史に主要な文人たちだ。 ひとりである。ことは煎茶に係っ 山陽、 湯川玄洋 梅逸、 『近世雅人伝』(19 鉄石、 ちなみに楊文驄は、煎虾石、星巌、いずれも煎 煎茶に係った文人た、史上に強烈な印象 0に

載る。

絵なのだが、制作の動機も過程も、文人らしい交人に見せられる。その刺激の中に描いたのがこの田が元の倪雲林の絵にもとづいて描いた山水を友田は典型的な南宗画山水。楊文驄は、明の沈石 遊の所産だ。

0

ともに滅んだ歴史事実による。 石や星巌がこの絵に感動したのも、 煎茶会の清談は、 さてこれを掛け 沈石田、 彼の壮烈な生き方が主題となろう。 話題は、 ※な生き方が主題となろう。後に鉄そして楊文驄その人へと移るであ た梅逸、 歴史観や時代意識にも及ぶの 描かれた山水世界か Щ 陽ら 0 楊文驄が明と 煎茶会を想像 5, 倪

である。 喜怒哀楽の 「文会」 詩的絵画的表現に加えて、 は文芸煎茶の集まりではあるが 時代に生き

> 首 6 の処世までが対象となる。

0 あるが、それがディスカッションによって、各人とすべき文人たちの作品を用いて思いを語るので 今を生きるあかしとしての「文会」である。古典 ることの表現となる。筆者が行って 心情と社会性の今に反響する。 して煎茶は、 今を生きること、 いる煎茶会も、 今を思索す

掛け、 流麗で強い美。 的 ある時、 の文人たち、 皆で1字1字を読み解いていく。 またある時、 農耕の豊かさに幸せが共有される儒教大雅の『社日図』を掛けた。古き中国 そこに潜む屈折の感情。 沈石田、祝允明や文徴明の書を 大阪にも似た経済都市蘇 高 い気品。

を読む。 の、 ある時、 痛切な造形美。 やがて帝によって粛清されたこの知識人で、明の永楽帝の最高官僚解縉の狂草の書

明末の大臣ながら清朝に寝返っ 現代のわれわれる。亡国の場にいる のる た

> た 庭。 来得ぬ今。 当然に現代の状況と重なっていく。 安を表す作品は少ないんじゃないかな」。 民族伝統の象徴かな」「日本でこれほど時代の不 相克で生み出したような世界。 ア るのかな」「植木鉢の菊がすごい存在感です しょうか」「国民党と共産党の闘争を反映してい 石もすべてに厚みのない世界。まるでシュー リスムのような表現。 現代の豐子愷 窓を開けて庭を覗う少女。 9 4 0 年代。 $\widehat{1}$ 8 黄色い光と影とに分断され 文人画の伝統が近代との 9 7 5 「近代の光と影で 建物も煉瓦壁も 煎茶でしか出 の絵を掛け 話題は ルレ ね。

いる。
化として、現代人の知性と感性を刺激しつづけてあった。煎茶会はだから今も非日常と非社交の文あった。煎茶会はだから今も非日常と非社交の文 人と呼ぶ漢文脈の知識人、儒学と漢詩文の教育を方の作法礼式のことだけでもない。煎茶とは、文煎茶は単に飲料の謂いではない。いれ方や飲み

- 家、また同様の学問教養をもった知識人の総称。中国では文人、*3 中国において科挙という試験によって選抜された官僚、官僚政治唐代以後、文会(茶会)の語らいを表す言葉としても用いられた。唐代宮廷の団茶用の薬研は金銀で作られた豪華なもの。 。 中国では文人、に官僚、官僚政治
- ・4 山水画や花卉図に用いられる絵画様式。中国水墨山水画の南宗画様式をもとに江戸時代中期から行われた。中国南宗画様式は中国が国の南画様式もそれに倣い「文人画」とも呼ぶれ、わが国の南画様式もそれに倣い「文人画」とも呼ぶ。
- 6 作品に、一般的思考や世俗的価値観を起えたままで「一年記しながらも、俗を離れることが大切である」と説いた。人に大きな影響を与えた。蕪村は『春泥句集序』で「俗語によっ人に大きな影響を与えた。蕪村は『春泥句集序』で「俗語によっ人に大きな影響を与えた。蕪村は『春泥句集序』で「俗語によったまなの重層化を求めた。明末の李漁が提唱し、わが国の文込の、意味の重層化を求めた。明末の李漁が提唱し、わが国の文込の、一般的思考や世俗的価値観を起えたままで「



頼山陽から山本梅逸、藤本鉄石、梁川星巌まで、

煎茶史における重要な文人たちは皆この絵に魅了

江山河亭図 楊文驄画 重要美術品

所蔵/遠山記念館

された。